

## 大島鎌吉のオリンピックピック運動（その二）

―クーベルタン布石について―

伴 義 孝

### 緒言

一九六二年六月三十日、大島鎌吉（一九〇八―一九八五）が歴史的現実的な「布石」となる一冊を邦訳して上梓した。書名を『ピエールドクベルタンオリンピックピックの回想<sup>①</sup>』（以下、「大島邦訳本」と書く）という。大島もまた一般的には「クーベルタン」と書く。しかしながら同書に限っては「クベルタン」と書いた。ドイツの関係者と語るときの大島は「クベルタン」と「ク」に力点をおいて発音する所以である。実のところ大島邦訳本はドイツとの生涯に亘る緊密な「かわり」が存在しないのであれば世に出るはずもなかった。その思いが籠められているのだと読み解いておきたい。冒頭の日付「三十日」に傍点をふった。理由は出版作業に関連して結語で明らかになる。

議論に入る前に大島邦訳本の「訳者のことば」に注意しておかねばならない。

近代オリンピック競技の始祖は、ピエール・ド・クベルタン男爵である。このことは世界のスポーツ界で、だれ一人として知らない人はない。だがクベルタン男爵がどんな人で、どんな思想の持ち主で、どんな理想を描いてどんなに艱難辛苦して近代オリンピック競技を復活したか、さらにこれを現代の世界最大の文化的事業に発展さ

せるのに、どんな布石を打っていったかについて、残念ながらあまりよく知られていない。<sup>(2)</sup> (傍点今次)

大島は特定の用語法に拘泥する。引用文中の「競技」もそうである。こうした用語法にも連動する問題提起「どんな布石を打っていったか」を見逃さないのであれば、その一事においても、大島鎌吉の期待する、あるいはクーベルタン（一八六三〜一九三七）の企図する「オリンピック運動」について誤解の生まれることを防ぐことができる。

大島は一九五九年刊行のドイツ語版「再版本」を翻訳したのであるが、由来はドイツのオリンピック思想家カール・デーム（一八八二〜一九六二）の布石を土台にして始まった。しかも一九三六年にまで遡る。そうであれば大島邦訳本の出版意図を読み解くためには、歴史の前に立って検めなおして議論しなければならない。

「オリンピック競技を祝福することは、歴史の前に立ってこれをおこなうことなのであります」<sup>(3)</sup>（大島邦訳本）

右は一九三五年のベルリンで語ったクーベルタンの肉声（フランス語）である。当然だが「肉声」の収録されていないオリジナル版『オリンピックの回想 Mémoires Olympiques』（一九三一）では大島の意図を見通すことができない。したがって本稿ではクーベルタンとデームと大島をめぐる布石の循環型連鎖に焦点を合わせて議論する。

## 1 クーベルタンメッセージ

一九三二年十月十五日、ある大学生が本質的なオリンピック論を書いた。十行ほどの短文だが秀逸である。

希臘のオリムピックを現在に再現したのが近代オリムピックである。それは假令形體に於いて變革はあつても、四ヶ年毎にこの平和の祭典が壯嚴裡に舉行されて二週間の全世界の耳目は他の凡ゆる係争から完全に遮断されてしまうのだ。故にオリムピックは次の様なモットーを掲げる。“The important thing in Olympic Games is not to Win, but to Take Part.”と更に續け、<sup>(4)</sup> “The important thing in Life is not the Triumph, but the Struggle ; The

essential thing is not to have Conquered, but to have Fought well. To spread these precepts build up a stronger and more valiant and, above all, more scrupulous and more generous humanity. by Baron Pierre de Coubertin Founder and Life Honorary President of the Olympic Games.<sup>(1)</sup> 委員會（國際オリンピック委員會＝IOC）はこのモットーを金科玉條として「凡そ文明國は近代オリムピックに参加しなくてはならない」と云う。文明國は所謂「平和の使徒」を送って華々しく戦わすのだ。近代オリムピックは、だが併し歴史的背景を一つの使命乃至目的として有するが故にこそ、現代に於ける価値ある存在なのである。（ルビと括弧内補注今次）

二十三歳の学生大島がこのように書いた。この短文は『関西大学学報』（第一〇三号）に寄稿された「近代オリムピックに就いて」の全文である。同年八月四日、大島は第十回オリンピッククロサンゼルス大会の陸上競技三段跳で銅メダルに輝く。日本の三段跳は世界の最高峰にあつて代表選手三人「大島・織田・南部」で「金・銀・銅」を独占すると喧伝されていた。なかでも大島は金メダル候補の筆頭だった。しかし「八月一日」、選手村でガス爆発事故に遭遇し大火傷を負う。競技は「ホウタイを外したばかり」のブツツケ本番となった。<sup>(2)</sup> 結果は南部忠平が金メダル、大島が銅メダルで、織田幹雄は十二位だった。織田は前回のアムステルダム大会での金メダリストである。

このような情況にあれば、常人なら、応援してくれた在学生のためにも「事故さえなければ」とかと私情も交えて書く。だがそうでないところに非凡さが頭角を顕している。ときに大学生なら文中の英文ぐらい小奇麗に訳出できようか。しかしそうしたのとは、機の熟す三十年後を待って、一九六二年の大島邦訳本の「扉」においてであった。英文のままに書いたのは資料価値を優先させたのだと思いたい。

人生で最も重要なことは、勝つことではなくて戦うことである。本質的には「勝つこと」ではなくて、けなげに闘つたことである。この規範の広くおよぼすところ、人間をより勇敢により強健にし、そのうえ、より気高くより

優雅なものにする。ピエール・ド・クベルタン（傍点今次）

大島はフランス語の原文も掲げ右の訳文をはじめ活字にした。だがそこには一九三二年報告の前段の文言が削除されている。実は後段にこそクーベルタンの意志「布石」がある。明治革命以来の日本では外来文化の受容に際して、すべてを目に見え、有用性論理に基準をおいて取捨選択してきた。この問題に関連して大島が口癖に言う。

「：オリンピックとスポーツの表層面だけを見ていたのでは、その本質（深層）は見えてこない：」

日本は日清戦争（一八九四—一八九五）と日露戦争（一九〇四—一九〇五）に勝利して、旗印「列強に追いつけ追いこせ」を掲げ軍国主義を驀進させてきた。明治四十一年（一九〇八）生まれの大島の少年時代がそうである。そして一九三一年の満州事変を契機に権益競争をめぐってアメリカをはじめ列強との対立構造が顕在化していた。

一九三二年のロサンゼルス大会はそんな時代に開催された。大島の特異体験がある。八月五日、五千<sup>五</sup>里走での竹中正一郎は十二位に終わる。その竹中が、一周遅れのゴール前直線で、先頭グループを妨げないようにインコースを譲った。斯くして感嘆した大観衆は「あと一周」を走る竹中の健闘を讃えつづけた。大会期間中は「日本の侵略的な政策に批判的で排日的傾向が強かった」のだが、翌日の現地新聞は「観衆の心の中の優勝者はスポーツマン精神に溢れる小さな日本人竹中だった」と書き立てた。<sup>5</sup>竹中は「けなげに闘った」のである。本稿では、一九三二年の大島が書いた所感「平和の使徒を送って華々しく戦わす」はその現実把握に促されて湧出したのだと読み解いている。

二〇一三年になって、大島報告「英文モットー」についてルボライターの岡邦行が取材で訊き出してくれた。

「それ（英文モットー）をノートに写し、初めて日本に紹介したのが大島であった」<sup>6</sup>

モットーは選手村に「クーベルタンメッセージ」として張り出されていた。大島の青年意識が竹中美談とも重なってメッセージの本質を発見させたものではなかったか。そう見定めるならクーベルタン布石が的中したことになる。

## 2 運命の一冊

クーベルタンは一九二五年にIOC委員長を勇退している。後進に託すこの辞任も実は布石であった。

清潔なクーベルタンは、引退後身をひいたままIOCやオリンピックに顔を見せなかった。顔を出すと、世間から委員長など役員の地位が軽視される。このことを避けたのである。<sup>(7)</sup>（大島回想）

とはいえその後も要請があれば「メッセージ」や「講演」や「意見書」を以て布石を打ちつづけたのである。

一九三五年八月四日、デイームの招聘に応じたクーベルタンがベルリンでラジオ講演をおこなった。演題を「近代オリンピックの哲学的原理」<sup>(8)</sup>という。そのさいデイームはベルリン五輪組織委員会の事務総長だった。実はこのクーベルタン講演も布石なのである。本稿ではこの問題に焦点を合わせオリンピック運動の如何を検討してみる。

第一次世界大戦（一九一四—一九一八）はドイツの敗戦で終わった。この大戦で一九一六年の第六回オリンピックベルリン大会が史上初の中止となる。そこで名誉挽回のため一九三一年のドイツスポーツはデイームを中心にして第十一回オリンピックベルリン大会の招致を勝ち取った。俗にこの一九三六年大会は「ナチ・オリンピック」だったといわれている。<sup>(9)</sup>だが精査すれば複雑な内実が伏在している。そもそもナチスは財政逼迫を理由に招致運動に反対であった。しかし一九三三年にヒトラー政権が成立すると一転して国威発揚のためオリンピック利用を画策したのである。斯くして「ヒトラー政権」と「IOC」と「ベルリン五輪組織委員会」の三つ巴の葛藤が始まる。

結果として「ヒトラー」は現代史における絶対悪である。しかし政権に就く前後のヒトラーはドイツ国民の絶大な支持を得ていた。他方で一九三六年十一月二十五日、日独防共協定が締結され日本でも「ヒトラードイツ」を友好国として認めている。そうした時代に大島はベルリンで開催された一九三六年オリンピック大会で日本選手団の旗手を

務めた。大島は再び金メダル候補だった。しかし六位に終わる。このさいの金メダルは田島直人で、銀メダルが原田正夫である。ここでは議論を進めるため、先にデイームと大島の間関係を整理しておかねばならない。

「亡夫カール・デイーム博士は、オーシマ教授との最初の出会い、一九三二年、ロサンゼルスにおけるオリンピック大会のときである、と書き残している」<sup>⑩</sup>（リゼロット未亡人の一九八五年書簡）

しかしながら前兆は遡る。一九二九年九月二十七日、デイームを団長とするドイツ陸上競技チームが来日した。そのさい大島はいまみえた。だが対話はまだ始まっていない。一九三〇年、大島は初めての欧州遠征に参加した。デイームが日本選手団を受け入れたのである。この機会に「一九四〇年第十二回オリンピック」の「東京招致の可能性」を日本は探り出している。こうした動向からすれば青年大島も歴史の前に立ち会ったことになる。

中学生時代の陸上競技部顧問で英語教師の斉藤守二が若き日の大島について語っている。

「外国から陸上競技に関する指導書などを取り寄せては大島に読ませた」<sup>⑪</sup>

斯くして洋書における研究が身についていた。一九三〇年の欧州遠征で、大島はデイーム著作の何冊かを日本へ持ち帰って読むこととなった。時代が変わって一九五五年の大島がデイームを日本へ招聘した際に紹介している。

デイーム博士は一九三〇年頃既に、生理学、生物学の視点から体育・スポーツを究明したばかりでなく、人間と人間完成の観点から体育・スポーツの形態的、現象的なものの奥にある本質的なものを指摘し、これを教育学的に展開して精神的、倫理的、形而上学的に組み立てるといふ事業を成し遂げたのである。<sup>⑫</sup>

このようにデイームへの私淑が一九三〇年代に始まった。一九三四年、大島は十五歳八十二日の世界記録を樹立した。同年、大阪毎日新聞社の運動部記者になる。一九三三年三月二十七日、日本は国連脱退を表明した。同年六月、大島は六ヵ月間におよぶ南米遠征へ出発した。そのさいの中南米各国では「野火のような日貨排斥運動」に遭遇して

いる。<sup>(13)</sup> 二年後の一九三五年三月二十七日、国連が日本の脱退を発効した。同年七月の第六回国際学生競技会とその前後三ヵ月間におよぶ欧州遠征では大島が監督を務めた。そしてドイツをはじめ何処においても「国連脱退を果たした日本の国力を評価する歓待」を受けた。<sup>(14)</sup> 実に青年大島の経験する世界は「チグハグ」に激動していたのである。

一九三六年、クーベルタン布石を継走するドイツ語版『オリンピックの回想 OLYMPISCHE ERINNERUNGEN』がベルリンで刊行された。やがてこの「一九三六年初版本」が二十六年後の大島邦訳本に繋がる。斯くしてベルリン大会での大島は「運命の一冊」と遭遇したのである。しかし大島が同書を読み熟すのには「一九三九年」という、さらに邦訳するのには「一九五九年」という、時代と共に錯綜する歴史的現実的な契機を待たねばならない。

### 3 二つの視点

一九六二年の大島邦訳本は、デイーム編集の「一九五九年再版本」を定本として、次の六部構成で上梓された。

一、クーベルタンの肖像写真と扉。扉には大島訳出の「クーベルタンメッセージ」が収載されている。

一、大島の「訳者のことば」(三十四頁・一九六二年執筆)。

一、デイーム解説「ビエール・ド・クベルタンという人」(七一―一四頁・一九五九年執筆)。

一、クーベルタン著『オリンピックの回想』(一五―二〇頁・一九三一年執筆)。

一、クーベルタンラジオ講演「近代オリンピックイズムの哲学的原理」(二〇―二七頁・一九三五年放送)。

一、IOC関係各種年表の付録(二〇八―二〇九頁)。

本稿の副題「クーベルタン布石について」の意図は、これら六部構成の歴史的現実的な読み合わせを怠るとき、検証の全容掌握を拒否されてしまう。そこで本稿は「三つの視点」に絞り込んで議論を展開する。

### 3・1 「歴史の前に立つ」という視点

まずデイームの語るクーベルタン像を軸にして、本稿の間う「歴史の前に立つ」という視点を整理してみる。

クーベルタンはバラ色の観念主義者として彼の事業に着手しかつこれを発展させたものではなかった。理想さえかかげればそれで自ら発展していくものだといった甘い考え方をもっていなかった。彼にとつてオリンピック大会はスポーツが常に新しくもつ問題を解決する場であつた。そしてその解決のためには、野卑と欺瞞に対し執拗に格闘し、あらゆる奸計に立ち向かう高い志操を奮い起こすことが必要であつた。<sup>15)</sup> (大島邦訳本・ルビ今次)

右にルビ「ママ」をふった「大会」は用語法に厳格な大島からすれば「競技」と書くのが妥当である。しかし、そうなっていない。理由は結語において詮索してみる。実のところ本稿の課題とする「三つの視点」とは、一九三五年のクーベルタンもかわることになるヒトラー政権「奸計」に対峙して始まる闘いが発端になっている。その発端となる史実について一九九四年のIOCが出版した『国際オリンピック委員会百年』に訊き出しておく。

「ナチス政権はベルリン大会の準備の間、そして大会期間中は比較的抑制の利いた態度を示した」<sup>16)</sup>

前述の三つ巴の葛藤は、一九三三年一月三十日に成立したナチス政権の「ユダヤ人迫害政策」と、アメリカ先導の「ベルリン五輪ボイコット運動」との狭間に生起した。一九七二年に公開された確な歴史的現実把握がある。ヒトラー政権はすでに狂気じみた人種政策を推し進めていた。そこでIOCとしては、ベルリンオリンピックがオリンピック憲章どおりに行なわれることを保証するため、既に活動を始めているベルリン五輪組織委員会をナチス政権が支援することと、一切の差別も政治的干渉も行なわないことをヒトラー政権に誓約させる必要があつた。これは第五代目のIOC委員長となるブランデー(一八八七―一九七五)が振り返って述べた葛藤の証言である。<sup>17)</sup>

一九三三年六月五日、IOC理事会がウィーンで開催された。主たる議題は「ベルリン五輪組織委員会」の承認問



題であった。その様相をドイツ側の出席委員で組織委員会事務総長のデームが日記に書き留めている。<sup>18</sup> 組織委員会は問題なく承認された。問題の焦点はボイコット運動を喚起させている「ユダヤ人差別問題」にある。ヒトラー政権の内務大臣フリックが誓約書を提示し「原則としてユダヤ人をオリンピックから除外することはない」と宣言したのである。デーム日記はこの「ウーイン宣言」が存在しないのであれば「ドイツは国際オリンピック委員会に留まらない」ことになったと明記している。斯くしてIOC理事会は「ドイツはオリンピック憲章を守る」「ユダヤ人はドイツチームから除外されない」の二点を決議した。ただし、この段階ですべてが解決したわけではない。

一九三五年九月十五日、ドイツ人とユダヤ人の婚姻を禁止する人種差別法「ニュルンベルグ法」が制定された。同時にベルリン五輪ボイコット運動が激化する。実にこの国際動向が史上はじめてのオリンピックボイコット運動であった。こうした状況下にあつて同組織委員会はオリンピック競技大会の組織運営のすべてをIOCから委託されていた。そうであれば調整役として板挟みになる。一九三五年十一月五日、調整の結果「IOC委員長ラツール」と「ヒトラー」の会見が実現した。この会見において前述してある「ユダヤ人差別の抑制」が確認されたのである。<sup>19</sup>

他方でヒトラー政権に対峙した二つの動きを見落としてはならない。一つは大島の語るブランデージに拠る。

ブランデージは教祖クーベルタンの忠実な使徒である。キリスト教史でいえば彼はセント・ピーターを自認し、キリストであるクーベルタンの教えを誰よりも忠実に守り布教に献身しようとしている。<sup>20</sup>

献身的なブランデージは生涯に二度もの反「オリンピックボイコット」運動を展開した。しかも自国アメリカに始まるボイコットを抑え込んだのであった。一つが一九三六年のベルリン五輪ボイコット運動で、他が一九四〇年の東京五輪ボイコット運動である。結果として前者は開催されたが、後者は開催返上に追い込まれた。

このような時代にあつて、はたして一九三五年のクーベルタン講演は如何なる意義を歴史的に担ったのか。

人間の春（潜在する青年意識）は、若々しく成長した（すべての）人の中に表現されるのです。オリンピック競技は、この若々しい成人を祝福するためにおこなわれなくてはなりません。この若々しい成人を祝福するのに、一定の規則的な間隔（四年間のオリンピック・アード）を置いて、その時一時すべての争い、意見の相違、不和を止めることを宣言する。（そのためにはベルリン五輪ボイコット運動を阻止する環境整備が必要です。）それ以上に彼ら（若々しい成人）のためになることがあるではありませんか。<sup>(2)</sup>（大島邦訳本・括弧内補注と傍点今次）

クーベルタンのラジオ講演はこの一節をヒトラーに聴かせるため語ったと読み解かねばならない。斯くして環境整備の一助を果たしたブランデージは一九三六年大会の実現に寄与したのである。もう一つはディームの事跡である。右にクーベルタンは「祝福するために」と語った。この問題を先に読み解いてからディーム事跡を振り返る。

### 3・2 「祝福する」という視点

ここまで本稿もまた「オリンピック大会」を「開催する」という文脈の記述を多用してきた。理由は慣用的に定着していることにある。ジャーナリズムもそう書く。大島も一般的には同様である。実のところ近代オリンピック競技の発祥地ヨーロッパにあつてさえ、オリンピックを対象論理で物象化させて捉えるかぎり、原義を以てではなく、おりの共通概念を適用する。こうした構図を「三つ巴」の様相に当て嵌めて要約してみるとわかりやすい。

一、ヒトラー政権は国威発揚のために「オリンピック大会」を「開催する」ことに拘泥した。

一、IOCはクーベルタン布石を受け継いで「オリンピック競技」を「祝福する」ことに拘泥する。

一、ベルリン五輪組織委員会はオリンピック憲章に則って歴史的現実把握のもとに「原義」に拘泥する。

右にいう「大会」も「競技」も英語表記を適用すれば同じ「Games」であつて、「開催する」の表記は「hold」が

相当し、「祝福する」は語義どおりならば「celebrate」と書く。そして現象「Games」における邦訳語の使い分けは、このさうい意義素「Olympic Games」の捉え方「ものの見方」の相違に派生するのであつて表現意図も異なる。そこで議論を簡潔にするため大島「スポーツ」思想の中心概念を借りて問題とすべき視点を先に整理しておきたい。

第二次世界大戦中の大島鎌吉は六年間に亘る「死線のドイツ」<sup>(22)</sup>を毎日新聞特派員として取材した。ベルリン陥落を見届けた大島は数奇の運命を乗り越え日本へ生還した。斯くして戦後の大島は戦争を以て過剰な近代化路線の恣意が誘発させる窮極の過誤であると自覚する。こうして培養された戦争観と歴史観を以て近代化路線の産出させる過誤の「最大の犠牲者は青少年である」と覚知する。そのため大島は一貫する課題「青少年育成運動」の実現を生涯に亘って追求した。一方で十八世紀半ばに始まる産業革命は技術革新の近代化過程に同調する。そのさうい技術革新は「プラス側面」と「マイナス側面」を生起させる。そうであれば「マイナス防止」を怠つてはならない。大島見解では技術革新を人間の生命原理的な存在根拠「動く・働く・作る」の代位装置文化であると見做している。<sup>(23)</sup>

先行研究では大島命題「スポーツで何ができるのか」に視点を置いて右のような中心概念を炙り出してみた。斯くして大島思想はその中心概念の追求指針「マイナス防止」を要約しきつて次のように凝縮させたのである。

「…技術革新（近代化路線）のマイナス防止を怠るな！怠る儉安を許すな！…」

近代ヨーロッパ科学主義はその合理主義的視点においてプラス側面「目に見える成長路線」に過剰な有用性論理を適用してきた。そして一般的にも「オリンピック」を物象化させ競争原理や経済原理を先行させる対象論理として捉える。ヒトラーもまた「オリンピック大会」を国威発揚のために「開催する」という対象論理を以てプラス発想「自己目的」を追求したのである。ここでは大島指摘を借りて「祝福すること」を具体的に掘り下げてみる。

一九八四年の大島「絶筆随筆」<sup>(24)</sup>がオリンピックの開催様態に関連して問題点を指摘した。

オリンピック競技は歴史的経過をたどって現在の形になったのだが、オリンピックの焦点がどうしても「勝ち負け」に流れるので、その環境の位置づけが「もうひとつ」はつきりしない。

譬えるなら一九三六年の第十一回ベルリン大会の場合、慣例としてオリンピック選手の参加招待状が「ベルリン五輪組織委員会」から「各国オリンピック委員会」へ発送された。その「招待状」に関連して大島が指摘する。

そこでオリンピック憲章にしたがって開催理由をみると、招待状には「わが国で開催する四年に一回のオリンピックには（年度と期日、期間を明記）貴国の優秀選手を招く」とある。目的は「世界の平和」で、行事として各種競技（competitions）と各種の称賛（celebrations）が行なわれると記してある。

大島絶筆随想がこの間の仕組みに注意して「ところが日本語でcelebrationを『開催する』としたところに大きな誤りがある」と問題を提起する。クーベルタンはこの誤認を防ぐために「オリンピック憲章」を創案した。しかし憲章の内容は硬直なものでなく時代の要請を受けて常に変わる。ここにクーベルタンの布石がある。そうであれば憲章の深化を念頭において書き遣された『オリンピックの回想』を読み比べないとき誤解を招来させてしまう。実に大島指摘「celebrationの和訳問題」はその誤解を避けるための布石「憲章の深層を読み熟せ」だったのである。

現在の憲章第三十二条「Celebration of the Olympic Games」は日本オリンピック委員会の訳出で「オリンピック競技大会の開催」と意識される。意識は外来文化の受容に当たって確かに共通理解を促す。しかし意識が優先されるとき原義への視点が疎かになる。該当語「celebration」は第一義として「祝賀、祝典、儀式、祭典の挙行」と和訳される。そこで「挙行する」を慣用語「開催する」に意識してあるのだが、そのさい「なに」を「祭典」として「祝福する」ために挙行するのか、その意義素が風化してしまいかねない。大島はこの問題を指摘したのである。

ついでに大島邦訳本の特筆するクーベルタンの拘泥についても訊いておかねばならない。

オリンピック大会 (the Olympic Games) は単なる国際的な選手権 (championships) ではない。全世界の青少年のため、「人間の春」のために四年毎におこなわれる祭典である。<sup>(25)</sup> (大島邦訳本・括弧内補注今次)

右の訳出のままでも通じる。しかし大島用字法を問題にしている本稿としては、ルビをふった慣用語「大会」を、このさい「競技」に置き換えたい。そして「選手権」を対照的に「選手権大会」と書いておきたい。だが大島邦訳本には、校正ミスか意図的なかは不明だが、注意すべき「大会のママ」の記述が「本文三〇頁の引用文中」と「右」のそれを合わせて二箇所ある。なぜなのかの推察は結語に譲る。しかしここで確認しておくべきことは、「オリンピック競技」と「選手権大会」とを、クーベルタンが同列に扱うことを拒否している所以にあらねばならない。

### 3・3 「暗喩」という視点

それではドイツスポーツの良心を代表するディームは「三つ巴の葛藤」に如何にかかわったのか。

ディーム博士がオリンピックプログラムを今日の規模に整理したこと、スポーツと音楽と芸術を結びつけて開会式で、ベートーベンの第九シンフォニーを演奏したこと、勝者にオリヴの枝に代えて柏の木を贈ったこと、オリンピックとオリンピック都市を結ぶ聖火リレーを実現したこと、オリンピックの鐘 (平和の鐘) を着想したことなど何れもオリンピックの理想を実現しようとした試みであった。<sup>(26)</sup> (傍点今次)

一九五五年の大島が「ディーム博士の人と業績」をこのように紹介した。だが思い込みがある。「第九」の演奏は開会式当日の市街地においてであった。この経緯についても結語で検める。ところで一九三六年を契機に「オリンピックの内容が一変した」のである。だが不幸にも「そのまま」に評価されていない。理由はヒトラーの「国威を宣伝するために行なった厚化粧」が、ディームの「意図するもの以上に人目を引いた」からである。大島がそう分析して

いる。いずれにしてもディームは三つ巴の葛藤を解消させるためにクーベルタンと再三再四の対話を重ねた。

クーベルタンとディームはオリンピックの理想を分かち合い企画の「文化的デザイン」について話し合った。そのさい組織委員会は「クーベルタンが大会に参加する」ことを懇請している。だが、クーベルタンは断った。しかし結果的に「一九三五年八月四日のラジオ講演」だけは受諾した。一九九四年のIOCがそのようにディーム事跡を記録している。そうであれば「ラジオ講演」の締め括りの「肉声」を吟味しておかねばならない。

オリンピック競技を祝福することは、歴史の前に立つてこれをおこなうことなのであります（再掲載・本文二四頁参照）。歴史は何にもまして平和を確保してくれるものでしょう。お互いに愛し合うことを諸民族に求めるなどは子供じみた願いであります。しかしお互いが尊敬し合うことを求めることは幻想ではありません。とはいえず、まず第一に自己を尊しとすること、知らねばなりません。未来の教えとなるべき世界史は、十分研究され、また地理的にも考察された形の中で、唯一の真の平和の基盤となるでしょう。わたしはもう晩年を迎えましたが、第十一回オリンピックアードが近づいているこの時、わたしの願いとみなさんへの感謝の心を述べ、さらに青少年と未来について、動かし得ないわたしの信念を述べることができました<sup>(28)</sup>。（大島邦訳本・括弧内補注と傍点今次）

引用文に問う「自己を尊しとすること」と「地理的にも考察された形」の意義を歴史的情況に照応させて咀嚼すればクーベルタン布石の深遠であることが理解できるはずである。このさい前者は、日本の古事援用が許されるならば「和を以て貴しとなす」と説論していることになる。そのうえで「ヒトラーよ」「わきまえよ」と暗示している。また後者は、古代ギリシアで「オリンピック競技」を「祝福する」ことと思想性を想起せよと説論していることになる。そのうえで「一九三六年のベルリン」を祝福すれば古代ギリシアにも譬えられ歴史にその名を残すのだから「心して慎め」と暗示している。このようにクーベルタンの一九三五年「ラジオ講演」は画期的であった。

そればかりではない。さらなる歴史的現実問題がある。実のところクーベルタン布石が、二十八年もの時空間を超越して「ベルリン」から「東京」へと「地理的にも考察された形」において、大観衆の前で再現され響き渡ることになったのである。一九六四年の第十八回オリンピック東京大会の開会式においてであった。クーベルタンの肉声が国立競技場に響き渡った。なぜなのか。この問題も結語において推察してみる。

#### 4 三つの決意

確かめておかねばならないことがある。一九六二年出版の大島邦訳本は如何なる契機のもとに成就することになったのか。本稿では大島の境涯に認められる「三つの決意」が契機の出发点になっていると見定めている。

#### 4・1 「一九三九年九月一日」の決意

一九三七年七月七日、日中戦争（一九三七—一九四五）が始まった。斯くしてアメリカが一九四〇年の東京五輪ボイコットを呼びかけた。そして懸念するIOCが東京五輪組織委員会へ「返上」を勧告することになる。この勧告発動には一九一四年に始まった第一次世界大戦に際してクーベルタンへ圧しかかる各国の干渉が布石になっている。<sup>(29)</sup>

当時のドイツは戦争がドイツの勝利で直ぐにも終わると信じていた。だから国際オリンピック委員会からうけていたオリンピック大会開催の委託を返上しようとは思っていなかった。（大島邦訳本）

このさいクーベルタンは「あらゆる干渉」を拒否した。実に国際世論は「すべての国際的組織からドイツを除名せよ」と厳しかった。しかし返上勧告を急いだらドイツの友好国も侮れなく「オリンピック集団IOC」を分裂させかねない状況にあった。結果として一九一六年大会は時間切れとなって、已む無く中止に追い込まれたのである。

あるオリンピックは祝福されなくてもよい（場合に因って仕方がない）。だがそのオリンピックの回数は数えなくてはならない。これは古代（オリンピック）の伝統である。（大島邦訳本・括弧内補注今次）

右は苦汁のクーベルタン回想である。結果的には世界史がドイツに不名誉の烙印を捺した。このさいもドイツがベルリン五輪組織委員会の事務総長だった。一九一九年、即ちドイツが敗戦国となった翌年、そのドイツが「ドイツ青少年競技会」を創設させた<sup>30</sup>。復興作業の一環だった。戦争の最大の犠牲者は青少年である。青少年を救い出すためにスポーツで何ができるのか。ここにドイツ思想の形成原理がある。斯くしてこのドイツ思想が、第二次世界大戦を挟む大島思想の形成過程において、大島の意志に肉化することになる。

一九三〇年、日本ではじめてのオリンピック招致運動が東京市長永田秀次郎の政治的展望を以て始まった。大義名分は「紀元二千六百年（一九四〇年）の記念行事」として開催し、「帝都繁栄の一助とするため」にあった。この着想の発端については前述してある。招致は一九三六年七月三十一日のベルリンIOC総会で決定した。大島も翌日から始まるベルリン大会のために居合わせている。ところが一九三七年に日中戦争が始まった。斯くしてIOCは水面下で「東京五輪の開催返上」を促すことに動きだす。他方で日本政府と軍部は大義名分にかけても、東京五輪 boycot ト運動に屈することを拒むためにも、返上には踏み切れなかった。しかし財政窮迫に陥って一年後の一九三八年七月十五日、一方的に中止を決定した。他方で東京五輪組織委員会は、この国際信義に悖る責任放棄を懸念し、翌十六日に公式に返上を届け出る。即座にIOCは代替開催都市をヘルシンキに決定した。こうした一連の国際動向に後押しされて、大島の青年意識が「一九三九年九月一日の決意」を固めるときがやってくる。

一九三九年三月一日、新聞記者として返上劇の一部始終を承知している大島が「声明文」を書く。

日独文化協定が交換すべき文化事項に体育運動（スポーツ）を挙げていることは当然であるとはいえ、この協定



を実行に移す努力を為すことには両国民が互いに多少とも義務を感じて良い筈である。今回の「ドイツ行」(第八回国際学生競技大会への選手派遣)だけは決行すべきが防共紐帯国民として義務履行であると考ええる。本計画の強みはハーケンクロイツの国へ文化挺身隊として突撃することである。(括弧内補注今次)<sup>32)</sup>

結果として声明文が認められ、しかも大島が団長兼監督に任命された。こうして大島の青年意識に二つの希望が棲み込んだ。声明文を以て「次代の体育文化発展の礎石を置くため」に「遠征の必要」を直訴した大島の希望は、一つにオリンピック返上の日本が「世界スポーツの孤児」になることの防止にあった。もう一つはドイツ遠征へ携えることになった使命「ヘルシンキ五輪参加への環境整備」を実現させる交渉にあった。一九三九年八月十八日、大日本体育協会が声明「ヘルシンキ五輪へ精鋭主義で参加」を発表する。大島交渉成立の証左である。携えていた協定内容は「ドイツが一九四〇年に日本の男女選手六十名を招待し、この機会に日本がヘルシンキ五輪へ参加して、一九四一年に日本がドイツを招待する」となっている。<sup>33)</sup>交渉成立のためにはディームの後押しが大きかった。

しかしながら遠征中の「九月一日」、ドイツ軍がポーランドへ侵攻して第二次世界大戦(欧州戦線)の開戦となる。大島は選手団を引率し大西洋航路で撤退したのである。大島は出港直前に「私をドイツへおけ」と毎日新聞本社へ打電している。そしてニューヨークに着いて「九月二十日付」でベルリン特派員の辞令を受けた。斯くして選手団を日本へ見送ったあと、単身でベルリンへ逆戻りした大島はドイツの従軍記者となる。大島三十歳。青年意識の「なに」がこの「決意」を選択させたのか。現代人の合理的な価値判断「損―得」に拠っては理解できない。

ここでは見落とすことのできない一つの契機を確認しておかねばならない。六年間に亘って欧州戦線取材することになった大島は各地でオリンピックの仲間との旧交を温めた。とりわけドイツでは生涯の師と仰ぐことになるディームをはじめ仲間と共鳴し、堅固なスポーツ交流基地「ドイツチャンネル」を構築した。歴史的にみればこのドイツ

チャンネルとの対話がその後の大島思想の形成と大島実践の展開に先覚的な影響力をもたらすことになる。<sup>(34)</sup>

#### 4・2 「一九四五年八月一日」の決意

一九三九年九月一日、即ち第二次世界大戦（欧州戦争）が勃発した日、大島はノルウェーのベルゲン港に停泊中の靖国丸で待機していた。選手団十二名は九月四日のニューヨークへ向かう出航を待っていたのである。そのさい大島はデイームと電話で対話した。文化交歓として価値づけられたドイツスポーツへの訣別となるかもしれない。<sup>(35)</sup>その思いを籠めてのことである。デイームの悲痛な声が忘れられない。晩年の大島がそう言う。悲痛が語る。

「…ケンキチ、すまぬ。ドイツはオリンピックでの国際公約を守ることができなかった。許してくれ…」

説明が要る。一九三六年八月一日、第十一回オリンピックベルリン大会はヒトラーの開会宣言で始まった。

「…私は、第十一回近代オリンピックアードを祝福するために、ベルリンオリンピック競技の開会を宣言します…」

直訳すれば右のようになる。国家元首に委ねられる宣言は「文言の一字一句」まで決まっている。その都度に変わるのは傍点をふった二箇所だけである。さらに国家元首にはこの名誉「宣言」以外の関与は認められていない。デイームの悲痛な声はヒトラー「開会宣言」と無関係ではない。開会宣言はオリンピック大会の期間中だけを「祝福する」ために公約するのではない。そうではなくて「オリンピックアード」の「四年間」に亘って平和であることを祝福する国際公約なのである。オリンピック憲章の定めるオリンピックアードとはオリンピック大会開催の最初の年の一月一日に始まって、四年目の年の十二月三十一日まで続く。このさいベルリン大会を例にすれば、四年目の「一九三九年十二月三十一日」を待たないで、その四ヵ月前の「九月一日」に戦争を始めたドイツは国際公約を反故にしたのである。

一九四五年、五月一日、ヒトラーはベルリンと共に、その数奇な一生に終止符を打った。彼の亡命説、潜伏説

等いまだにあるが、ベルリンを枕に戦死する以外の死に方を彼に求めることは不可能であろう。ベルリン陥落に引き続く、五月八日の全面降伏をもって、ヒットラーのドイツは、名実共に永久に地上から姿を消し、歴史の過去帳に綴じ込まれることとなった。「ヒットラー来たり、ヒットラー去れり、されどドイツ民衆は残れり」、廃墟と化したベルリンの至る所に、ロシア語とドイツ語の標語が掲げられている。<sup>(36)</sup>（傍点今次）

大島著書『死線のドイツ』は右の一文を以て書き始められる。この筆録は現地からの大島打電記事の再録であるとみてよい。ソ連軍部の公式発表のあるまで「ヒットラーの四月三十日自殺説」は明らかでなかった。したがって右に書く「五月一日」は大島の現実把握なのである。一九八四年の「もう一つの大島絶筆随想」も読まねばならない。

ベルリン陥落の第一報が欧州最後の仕事になった。鬼畜のように猛り狂う赤軍兵の顔を見るや、三百メートルさきの中央郵便局に走った。路上に苦悶する市民を踏み越え掻き分けて先を急ぐ非情が胸にズキンときてつらかった。が、とにかくガランとした大広間に呆然放心する係に電文を渡した。「打電できるか?」、「やってみます!」と答えてくれた。地下壕に戻って赤軍兵（ソ連軍）に捕まった。<sup>(37)</sup>

捕虜となったが運よく解放され、七月中頃「国際列車第一便」に便乗できた。ユーラシア経由で満州国を南下し現在ソウルに着く。そこで「読売新聞社の航空士」に拾われ「明朝発つから乗れ」となつて「一九四五年八月一日」に双発機で所沢空港に生還した。何ということはない、運がよかった。そうだと一九八二年の大島が振り返る。

内地にいたら赤紙一枚の徴兵。太平洋の孤島かビルマで戦死したはずだ。そう思うと、「この死に損ないは、やりたいことは、何でもやってやろう!」とその後の生き方（思想と実践）を決めた。<sup>(38)</sup>（括弧内補注今次）

生還後すぐ毎日新聞東京本社へ出社した。その第一声が「ベルリン陥落の記事は届いているか」であった。しかし届いていなかった。斯くして大島は「八月四日」から記者活動を政治部記者として再開する。

社説で占領地行政を間接法で批判し、検閲中のハン。三日後には掲載禁止ときた。三度目かには編集長から小言を喰らったが答えは簡単。「当局（連合国軍最高司令官GHQ）に、日本人にまだこんなのがいる、と思わせるだけで結構」と転属命令を受け入れた。<sup>39</sup>（傍点と括弧内補注今次）

生還後の大島は「元ベルリン特派員」の肩書で書く政治部の看板記者だった。ドイツの戦争末期には一般市民徴用の「国民突撃隊」やヒトラーユーゲント編成の「人狼隊」まで投入する悲惨な結末となった。さらに日本でも敗戦国の矛盾する実情「最大の犠牲者は青少年である」に直面した。斯くして大島の人生観と世界観が根本的に変わる。だから国際政治をも批判して書いた。右の大島回想にいう「間接法」とは敗戦国ドイツに対する米英ソ仏四ヶ国軍政府の執る占領地行政批判「一連の大島大型記事」を意味している。GHQの検閲が目を光らせているときだった。転属は検閲逃れの社命である。一九四六年十一月一日付で、大島は古巣「運動部」への転属を受け入れる。

#### 4・3 「一九四七年一月四」の決意

一九四七年一月四日、大島は「不退転の決意」を論説記事「スポーツ界の展望」<sup>40</sup>に書いた。宣言である。

わが国特有の軍隊生活には批判があったが、是非善悪を別にしてこれが青年の心身に与えた影響は練成の意味で極めて大きかった。戦争放棄で自由と奔放が見境なく乱舞している時、スポーツ（規則という一定の約束の下に行なわれる心身の鍛錬）が大写しに映し出されるのは当然だ。（大島論説記事・傍点今次）

私人としての大島は「心身」とは書かない。生涯に亘って「身心」と書いた。用字法にこだわるのは生き方の哲学である。右での表記「心身」は社内校閲がそうさせている。一方で「軍隊生活」と「戦争放棄」への言及はGHQの検閲に抵触しかねない。編集局長は削除を主張したはずである。だが妥協せずに記事になった。斯くして不退転の決

意が生涯を貫く命題「スポーツで何ができるのか」を追求させることになる。大島論説記事は三つの要処に代表される課題を以て構成されている。いずれもが日本と世界の「あす」を睨み据える先覺的な課題である。

第一に、論説記事は日本の「あす」に向けてのオリンピックの本質的課題の所在を示唆する。そのうえで十二年ぶりに開催される一九四八年の第十四回オリンピッククロンドン大会についても注文をつけたのである。

改めて世界のスポーツ地図をながめるならば二つの陥没地帯がある。一つはいうまでもなく日本であり他はドイツである。オリンピック憲章とポツダム宣言の精神をつき合わせればクロンドン大会には規約上、論理的にも時間的にも日独の出場を不可とする何ものもない。この際民主日本の青年が平和の使徒として改めて国際帰りに伍する意義は極めて大きい。ただ果たして現実世界の空気がこれを許すかどうか。（大島論説記事・傍点今次）

大島論説記事はこのように挑発的であつて休眠状態にあつた「体協」へ発破をかけたことになる。一九四七年一月二十二日、体協は「クロンドン大会への参加問題」を検討するため急遽「オリンピック準備委員会」を発足させた。大島鎌吉も幹事として名を連ねた。本稿はその経緯に大島論説記事が影響していると推察している。結果として敗戦国「日独」はクロンドン大会への出場を認められなかった。他方で同じ敗戦国「イタリア」は参加できた。論理矛盾がここにある。それからの大島は、国内外におけるスポーツ問題を論じる際、かかる論理矛盾を決して見逃さない。

第二に、大島論説記事は「戦前の封建的な過つたスポーツ政策」に逆戻りすることを許さない。

われわれはスポーツ界に声を大にして叫ぶことは「スポーツは国民大衆と共にあれ」「スポーツは大衆に基盤をもつて育成促進せよ」ということだ。（戦前のオリンピックを想起して）崩れかけたピラミッドの先端だけをながめて回顧し、弱弱しく「復興」をさげふ愚人の夢を縋つてはならない。（大島論説記事・括弧内補注今次）

斯くして大島が在るべき処方箋「スポーツ界の展望」を書いたのである。即ち大島は「心ある者は明治革命を契機

に始まった過つたスタートを切り直し、ピラミッドの基底を固めるため、敗戦のこの機会に、一から始めて『れんが』を運ばねばならぬ」と公言し賛同を促した。そして視点を「国民生活」において「スポーツ的要素」「文化的要素」を注入する「文化運動」を展開しなければならぬと訴えたのである。もちろん青少年育成運動の必要をも見通している。要するに戦後の混乱期にあつて大島論説記事は、世界にも先駆けるおどろくべき先見の明を以て、現代の世界共通語に換言すれば「みんなのスポーツ運動」という文化運動の必要を説いたことになる。

第三に、そして擱筆の直言として、大島論説記事が日本の「あす」のための「生き方の問題」に言及する。

敗戦ですべてが御破算となり地ならしされた今日、頑迷なる封建思想がスポーツ界だけに巣食うことが許されぬと同時に、（明治革命以降の日本が近代化路線のプラス側面を過剰に追求してきた現実を改めるため）本質的な転換、新しい再出発の好機を逃がすこともまた許されるべきでない。（大島論説記事・括弧内補注今次）

要するに一九四七年一月四日の大島は、スポーツを題材にして書いているものの、現在（二〇一六年状況）にあつても放置されている過剰な近代化路線の「本質的な転換」の必要を先覺的かつ革新的に指摘したのである。

この指摘から二週間後の大島は自著『死線のドイツ』を上梓し、当時の日本の反省すべき問題は「今日であるとともに明日である」と指摘した。ならば日本の「あす」のためには何が不可欠なのか。同じ敗戦国である「ドイツに比べて日本の情況」は、占領統治下のあらゆる条件を勘案しても、「良好でありこれが不幸中の幸いである」という「ものの見方」があつた。そして政界や経済界や教育界やジャーナリズムにも蔓延していた。だが、大島は違ふ。

農業国になり得ないドイツに、ドイツが生きるためにあの豊富な鉄と石炭の使用が許されるならば、それを基礎とするドイツ工業の再出発はスタートの出遅れを取戻すだけの充分な潜在力をもっていることを認めなければならぬ。日本の明日は今日の樂觀をもつて断じて儉安を許さぬであろうことは今から既に明瞭である。<sup>(1)</sup>

このさい大島思想を総合的に俯瞰するとき、右の筆録が大島箴言の出立点になっていると判る。箴言が言う。

「……技術革新（近代化路線）のマイナス防止を怠るな！怠る儉安を許すな……」（再掲・本文三三三頁参照）

大島は「日本には近代国家が不可避の要素とする鉄と石炭があるか」と自問する。答えは「否」である。それでは、どうすればいいのか。見通しは日本の「あす」を担う「青少年」の「育成運動」にしかない。即ち「人間づくり」である。そのさいスポーツの人「大島鎌吉」であればこそ「スポーツで何ができるのか」という命題に行き着く。既にこの問題は議論してある。ここで認識すべき視点は別にある。一九四七年一月四日の大島は、どうして、何のために、こうまでも先鋭的な決意表明を提示することができたのか。歴史の前に立つて検めておかなければならない。

## 5 それからの現実把握

死線のドイツを取材した六年間の大島は『共産党宣言』を懐にして持ち歩いた。<sup>(4)</sup>一九四七年の大島著書に書き込まれたこの独白からは二つの事実を読み取ることができる。同書に「書名」を敢えて書き込んだのは一つに当時のGHQの検閲体制に対峙する反骨精神がそうさせたのである。もう一つは「ドイツ語学習のために常備していた」という経緯にある。ここでは後者について補足しておく。大島常備のドイツ語学習書は二冊あった。

もう一冊が一九三六年刊行のドイツ語版『オリンピックの回想』である。ベルリンで記者活動を開始した大島はドイツをはじめ周辺国も含め知己を訪ね歩いている。取材と対話も兼ねていた。改めて「一九三六年初版本」を入手した大島は、戦時下の六年間をとおして、対話を交え読み熟すことになる。初版本にはクーベルタンのラジオ講演も収録されている。実はその収録を目的「布石」として同書は刊行されたのである。斯くして「読み熟し」と「ドイツチャンネル」と「死線のドイツ」がそれからの大島の生き方「思想と実践」を方向づけてしまった。

## 5・1 「近代オリンピックの検討」という現実把握

日本に生還してからの大島は書簡によるデイームとの対話を欠かしていない。そんな矢先にデイームが「余に残された命をドイツ民族のためにささげる」と知らせてきた。一九四七年十一月二十九日、廢墟のケルンにデイームが「スポーツ大学」を創設させた。こうしてドイツ民族の「あす」を担う「青少年」の育成基地が再開した。大島には大いなる刺激である。こうしたドイツ動向に促されて一九四九年の大島が問題提起の論文を書く。論文を以て「戦勝国には反省がない」「近代化路線の負の連鎖を直視せよ」と「あす」を担う「学徒諸君」へ訴えたのである。

鉄のカーテンや竹のカーテンを境として明らかに二つの世界が形成されつつある。この様相の中には、この主張する二つの理性にも感情的曇りのあることをわれわれは認めなくてはならない。従って冷静にこれを批判する資格をもつものは敗れた日本であり、ドイツである。<sup>(43)</sup>

世界の戦後体制を直視せよ。日本の青年にそう呼びかけたのである。青少年までが抑圧されていた時代だった。だから同論文で「内部に破局的な要素をもつ近代オリンピック」を批判することに事寄せて、実は近代化路線の恣意性を指摘してみせ、産出されるマイナス側面を黙視してはならないと「潜在する青年意識」の解放「覚醒と自覚」を促したのである。加えて同論文は「オリンピックを絶対なるものであるとするわが国スポーツ界の信仰は誠に不可解な迷信でなければならない」と戦前からのスポーツ界の体質を糾弾してみせた。大島が同論文で問いかける。

スポーツは人間の営みであるという赤裸々な現実こそは最も尊いものではなからうか。そしてこの見地に立つてオリンピックを眺め、オリンピックを批判し、オリンピックの在り方を定め、さらにその一環としての日本のスポーツを考えてこそ、初めて在るべき姿が描き出されるのではないだろうか。<sup>(44)</sup>（傍点今次）

この展望は「一九三六年初版本」を読み熟すことにおいて大島思想に肉化したクーベルタン布石が書かせた一端な



のである。実のところクーベルタンも「オリンピック大会の実態」を熾烈に批判している。一例を挙げておく。

商取引の場合、それとも神殿か！ スポーツマンがそれを選ぶべきである。あなた方はふたつを望むことはできない。あなた方は自分でそのひとつを選ぶはならない。スポーツマンがそれを選ぶ<sup>65</sup>！（大島邦訳本）

これは一九二五年のクーベルタンがIOC委員長を引退した際にプラハで宣言した「希望の言葉」である。具体的には一九三〇年九月十三日のIOC総会において公表されたクーベルタン意見書「スポーツの改革に関する原則」<sup>66</sup>にすべてが書き残されている。その原則の一つが「スポーツ的余興だけを目的に都市の役人が考えるマンモススタディオンの建設を軽蔑する」と当時の動向を直視して辛辣に批判する。実にクーベルタン布石はオリンピックを物象化させる経済原理優先の「ものの見方」を糾弾しているのであって、後年の大島展望と軌を同一にしている。

一九四八年四月、アメリカ教育使節団の勧告に由る学制改革を以て新制大学が発足した。斯くして一九四九年七月一日発刊の大島論文「近代オリンピックの検討」が「日本」の「あす」を担う「学徒諸君」に訴えた。大島論文は「ここに問題だけを投げかけた。これが解決はわれわれ自らの手によらねばならぬ」と結ばれている。一九六二年、この布石が大島邦訳本を上梓させたのである。ところが同論文発刊の「四十七日後」に大変事が起こった。

## 5・2 「蚊帳の釣り手論争」という現実把握

一九四九年八月十六日、ロサンゼルスにおける全米水上選手権大会で古橋広之進が一五〇<sup>67</sup>リ自由形で驚異的な世界新記録「十八分十九秒」を樹立する。占領下にあつて「人間までが卑屈になっている」とき、この古橋快挙が日本中を歓喜させた。連動するジャーナリズムまでもが「勝った」「でかした」の論調へ「戦前がえり」したのである。

要は後進資本主義国家としての日本の焦燥が先進資本主義国家に追いつこうとした明治維新以来のあの気狂いじ

みた努力が、ほとんど意味がなかった、方向が逆であつたと解つた今日（一九四九年当時）、再び意味もなく昔と同じ方向に眼を向けていて、国際試合でとかオリンピックになると思（列強に追いつけ追いこせ）に囚われ勝ちだということである。否むしろ囚われようと心持ちにしている点にある。<sup>(47)</sup>（括弧内補注今次）

斯くして大島は、古橋快拳の波紋がジャーナリズムを高揚させ、日本の政治、経済、教育をも「旧思想」へ逆戻りさせたと見定める。即ち、戦勝国へ同調して近代化路線のプラス側面を再び過剰に追求したのである。一方でスポーツ界にも時代精神「古橋快拳の波紋」に煽られて「金メダル至上主義」の土壤ができたがってしまった。

大島の造語に「蚊帳の釣り手論争」なるものがある。即ち「金メダル選手」をつくれれば「蚊帳の釣り手」となつて裾野「大衆スポーツ」をも引つ張り揚げられるとする「ものの見方」である。実際のところこの釣り手浮揚論「トリクルダウン方式」は古橋快拳の波紋として現今のスポーツ界や言論界や経済界にも根強く支持されている。のみならず二〇一六年状況の政治手法「アベノミクス」にも同じ発想が適用されている。実に大島思想は正反対に異なる。

古橋快拳をめぐる「たつたの一日の報道合戦」が波紋となつて、スポーツ界にあつては「蚊帳の釣り手論争」を定着させてしまった。そのさい大島ただ一人が「底辺積み上げ論者」だったことに注意しなければならない。爾来の大島は「釣り手」にしか関心をもたない風潮を徹底して指弾した。この孤独な論争を契機にして大島は青少年育成運動の旗手へと転身した。即ち「在るべき原点志向」を追求したのである。ここではディーム見解に訊ねておく。

クベルタンという人間の中に彼が創つた語オリンピック主義Olympismの復活者だけを見付けようとするのは誤りである。むしろ真新しい（心身一元論の）近代教育をうち立てその（スポーツ）教育によつて社会を改変し社会を新しい軌道の上で走らせようと願つた人であると見るのが正しい。<sup>(48)</sup>（大島邦訳本・括弧内補注今次）

普仏戦争（一八七〇—一八七二）の敗戦国フランスでは失地回復を求めて過剰な近代教育「主知主義教育」が支持

されることになる。クーベルタンはこの偏向教育が「危険を生む」と考えた。そして「祖国に新しい力をもたらす」ために「新しい教育」を、即ち「スポーツ的訓練」の導入で青少年に「生きる力」を与えようと願った。教育のみが青少年を救い出す。クーベルタンの信条である。したがってクーベルタンのオリンピック運動とは、スポーツ教育を根幹とする文化運動「青少年育成運動」にその原点があることになる。しかしながら日本においては、一九四九年の古橋快拳の波紋を受け「蚊帳の釣り手」にしか関心を示さない時代精神が一般的にも定着してしまった。過剰な近代化路線が舵とりを見失うとき青少年が犠牲になる。斯くして大島はドイツ動向を見逃さない。

### 5・3 「ドイツモデル」という現実把握

一九四九年五月二十三日、ドイツ連邦共和国（西ドイツ）が被占領下にあつて他律的に造られた。その秋には「ドイツ青少年団連合」が結成され、翌一九五〇年に「連邦青少年計画」が発足する。一九五〇年五月三十日には「ドイツスポーツ少年団」が創設された。これらのモデル形成にはディームの尽力が大きい。ドイツには「戦争」にまつわつて伝統的な教訓「青少年は育成されたそのとおりに民族の将来を形成する」が根づいている。言うまでもなく第二次世界大戦後では「ヒトラーユース」を反面教師に仕立てている。一九五五年の大島論文が看破した。

ドイツの復興は日本よりも甚だしい破壊の上に起こつただけに、その立ち上りに驚かされる。ドイツの復興は経済と少年教育の二本の柱に支えられている。<sup>49</sup>

続けて大島論文が戦後すぐの日本状況を点検評価して警告する。

右往左往してきた日本の大人という人種は、次の世代を考えるよりも、今日の問題に没頭した。だから教育についても権力をもって与えられたもの（米国教育使節団勧告）を鵜呑みにして目を白黒させるばかりであった。

右は自虐史観ではない。近代化路線のマイナス防止を怠る儉安を戒める教訓である。例えば朝鮮戦争（一九五〇—一九五三休戦）に際して特需景氣「今日の問題」を優先させたとき、無策のままに、文化悪「負の連鎖」を増殖させた。戦後すぐの日本では「少年犯罪が芽を吹く土壤」に見境もなく「肥料をやっていた」のは「大人」である。そう断じる大島はドイツ情況に学んで指針「ドイツモデル」を見つけた。戦後の日本は「明日の問題」（青少年育成運動）を放置したまま「今日の問題」（経済戦略）を先行させてきた。その原因は「古橋快拳の波紋」と「朝鮮戦争の特需景氣」に儉安を許してきた経緯にある。大島はそうだと断じる。他方で東西ドイツへの分割を経て「苦悩する西ドイツ」では「経済」（今日の問題）と「少年計画」（明日の問題）の二本柱を両輪とする復興政策を実践した。大島は彼等の懸隔に注意する。一方で西ドイツに遅れて一九五二年四月二十八日に独立した日本の政策は、近代化路線の負の連鎖を断ち切るための先行投資「明日の問題」を、即ち「青少年育成問題」を棚上げにしたと見做す。斯くしてその脱却のため、一九五二年の大島が、全国都市体育研究協議会の要請を受けて立ち上った。

一九五二年の日本は第十五回オリンピックヘルシンキ大会への参加が許された。大島は毎日新聞特派員として臨んだ。このさい大島は前後三ヵ月ほどをかけて欧州を東奔西走し数々の取材を独自におこなっている。もちまへの決心「やりたいことは何でもやってやる」がそうさせたのである。本番の記事はもちろんだが、それ以外の取材のすべては特ダネ扱いの記事になった。ギリシアでのオリンピック聖火採火式、ローマ法王との謁見、東ベルリンへの潜入、それにドイツチャンネルとの現地対話。記事にあまるものは論文として書き残した。余人には真似ができない。大島口癖が「大戦中の特派員は国際スパイでもあった」と語る。そのさいの大島外交ルートが現地での査証の調達や手続きなどすべてを可能にしたのである。なかでも本稿の評価する実績はドイツチャンネルとの交渉にある。実はその交渉を以て二年後に始まる「日独スポーツ少年団交流」に向けての調査と環境整備を済ませたのである。

この「環境整備」こそが、前述の「全国都市体育研究協議会」の要請に応えるものであった。

「いま（敗戦国日本）の青少年は、彼らの責任でない戦争と、それに続く悲惨な環境の中で育ち、体にも心にも大きな被害を受けている。このとき、社会と政治と文化と経済を建てなおして、青少年の育つ環境を整備することとは、大人の責任であり、大きな社会的歴史的使命である」<sup>(30)</sup>

要請はこのように大島に訴えた。共振して「ドイツモデル」の実態調査を引き受けた。ここに不退職の青少年育成運動が実践的に始まった。一九五二年にデリームへ依頼しておいた幹旋が結実し絶好の機会がやってくる。斯くして翌年の一九五三年八月、大島が西ドイツの首都ボンへ赴くことになって内務省と交渉を開始したのである。

所管局の扉を開けると、家庭・青少年・スポーツ局長は旧知のジーフェルトだった。「何だ、お前か？」で話がどんどん進み、結局、日独スポーツ少年団交流がまとまった。ホイス大統領とも会って了解をとりつけた翌年夏（一九五四年）、まず十二名の日本代表団がドイツの招待をうけて渡独した。<sup>(31)</sup>

ジーフェルトはドイツチャンネルの主要人物でもある。この交渉を契機にして一九五五年の大島が布石を打つ。そのため同年の十一月、カール・デリームを文部省や日本体育学会の協力を得て日本へ招聘したのである。目的が二つあった。一つはデリーム「スポーツ」思想を学ぶためである。もう一つは「日本スポーツ少年団」を設立するための世論形成に向けられていた。他方で一九五二年から一九五七年にかけての大島は、「ドイツモデル」を活用して、青少年育成運動の必要を説く膨大な著作物を書いた。本稿ではこの期間を大島思想の熟成期であると思積もっている。一方で一九五八年から一九五九年にかけての大島鎌吉は歴史の前に立つ偶発的な事件に遭遇する。

## 5・4 「一九五九年」という現実把握

一九五八年十一月、日本オリンピック後援会による募金横領事件が発覚した。半年前の五月十三日にＩＯＣ理事会へ東京オリンピック招致を正式に申し入れたばかりだった。ところで横領事件「使途不明金一億円」は、責任所在不明のまま、ホトボリが冷めた九カ月後に、即ち一九五九年八月五日に「日本オリンピック後援会の元事務局長、募金の不正使用で逮捕」という結末を以て幕を閉じた。実は事件発覚直後の一九五八年十二月二日に日本体育協会の会長東龍太郎が辞任している。辞任は東京都知事選挙へ出馬する予防線である。だが続く十二月二十七日、理事全員が総辞職してしまった。組織全体の敵前逃亡である。結果的にオリンピック招致は一九五九年五月二十六日のＩＯＣ総会で決定した。ところで日本体育協会の再編成は招致決定後二カ月も経った七月二十七日である。実に横領事件から二年間も日本のスポーツ中枢が空中分解情況にあったことになる。

ここでは二つの事実を確認しなければならない。一つはこの危機状況を救った経緯であって、もう一つはその理念である。危機を救ったのは追及する立場にあった新聞記者の大島謙吉であった。前述の理事総辞職の一週間前、即ち一九五八年十二月二十日、大島は「オリンピック・メダリスト・クラブ」の設立を提案して実現させた。織田幹雄を会長に据え、自らは理事となつて旗振りをおこなった。そのさい大島は「スポーツ少年団」の創設を「時の首相岸信介」に約束させる奇策に打って出る。その言質を得て国内外へ「オリンピック精神のスポーツ少年団を設立し、来るべき一九六四年の東京オリンピックを盛り立てる」とアピールしたのである。大島の動きは的確で迅速だった。

一九五九年三月十五日、発行の大島論文「『スポーツ少年団』への胎動」が述懐している。

クラブ結成の動機は一九六四年のオリンピック東京招致であった。招致に当たり体協がオリンピック後援会問題で一番大切な時期を空白にしている。それではいかんというので立ち上つたのである。そこで結成後の第一の仕

事は日本のメダリストの名で各国のメダリストに対して挨拶状を送ることであった。クリスマスと新年をチャンスとして諸外国の関係者に大いに注意を喚起したわけである。これは全く自発的な行為であった。<sup>(32)</sup>

メダリストの多くは各国のスポーツ団体役員であるしIOC委員とも緊密である。そうであれば世界にこの「ラブレター作戦」の意図が届く。さらに岸総理には主張「あすの日本の文化の担い手のことを思う時、国は体育・スポーツによる青少年の育成に責任をとるべきだ」を突き付けて詰め寄った。斯くして大島布石は臨機応変に躍動する。

実は同論文でも大島は蚊帳の釣り手論争を展開して「お茶の水の体協（日本のスポーツ首脳）は選手づくり以外には殆んど何も考えていない」のだから、東京にオリンピックを招致するにしても「オリンピックの理念が叫ばれずに周知徹底しない」と書いた。新聞では「責任を誰もとらないばかりか空中分解した」と指弾している。こうした一連の大島の「オリンピック運動」に注目した人物がいる。招致運動の中枢人物であった田畑政治<sup>（まきじ）</sup>である。

東京招致運動が本格化してきた五九年春、田畑氏からボクにモスクワはじめ東欧のIOC八票（東欧諸国は七カ国だがソ連が二票を持っている）を獲得するため飛んでくれないか、との要請があった。戦前の「鰻香オリンピック」（「匂い」だけ）の苦い思い出があったせいだろう。東京に決まっていた第十二回オリンピックを日中戦争で返上したことがある。「もう一度日本で」の思慕がいつも心の底にあった。一方子供たちにとってもオリンピックの姿を見せたいという願いがあつて、論争をはなれての要請を受け入れた。ミュンヘンの投票では七票が入った。それはとにかく、帰国するにつつと選手強化を手伝う破目になった。さて思うにかやの釣り手論争は、どうやら双方が両極端に立って互いに主張を譲らなかつたので延々とつづいた。<sup>(33)</sup>（傍点と括弧内補注今次）

田畑は大島の論敵であった。日本水泳連盟の会長も務め前述の「一九四九年古橋快拳」の演出者でもある。この間の「ラブレター作戦」と「東欧七カ国の票集め」を総合的に勘案すれば、大島が東京五輪誘致運動において歴史的現

実的な「見えざる大役」を果たしたことになる。実に朝日新聞の政治記者として辣腕を揮ってきた田畑政治は記者の目としても戦前と戦中と戦後の新聞記者「大島鎌吉」の手腕「一挙一動」を見落としていなかったのである。

一九五九年九月十一日、東京オリンピック組織委員会の編成が始まった。しかし「政府の横やりで選考をやりな<sup>54</sup>し、国会議員・都会議員を大幅にふやし計二十五人」となって調整が必要になる。田畑は先に組織委員会の実質的な統括者「事務総長」に決まっていた。こうした「横やり」を防ぐためにも田畑は大島を説得したのではなかったか。斯くして大島は、一九五九年九月三十日に発足した組織委員会の委員を受諾するとともに、一九六〇年一月十八日に開設された東京オリンピック選手強化対策本部の現場責任者「副本部長」を引き受けた。本部長は田畑だったが、組織委員会事務総長との兼任もあつて現場を大島に任せたのである。一九六三年四月二十四日からは大島が本部長として総仕上げの陣頭指揮を執る。ところで本稿の捉える「一九五九年の現実把握」とは、東京オリンピックの開催へと繋がる通過点において生じた諸問題だけにあるのではない。実はもう一つの「別の視点」にこそある。

東欧行脚を要請された大島は一九五九年四月二十二日に羽田を出発した。出発前に査証を申請できたのはポーランドとチェコだけだった。二十三日にハンブルグに着いた大島は、ボンとケルンを訪ねディームやジーフェルトなどの助言を得て綿密な戦略「七カ国で面談すべき人物と日時の設定」を練った。他の五カ国の査証は飛ぶ先々の現地調達だった。対応してくれたのは大戦中に開拓しておいた「大島外交ルート」である。大島は東欧行脚の途中でウィーンに立ち寄っている。目的は五月六日開催の「国際スポーツ記者連盟理事総会」に出席するためだった。そこでも大島はラブレター作戦を展開したのである。本稿でのこの記述はそのさいの大島取材ノート『Tokyo Olympic 東欧訪問誌』<sup>55</sup>に拠る。大島は票集めを終え五月十六日にローマに入った。五月十八日には「IOCと四十八カ国NOCとの合同会議」に出席している。ラブレター作戦はここでも展開した。五月二十日にミュンヘンに着く。IOC総会ではカ



ール・デيلمに落ち合うことになっている。こうして二十七日間におよんだ特命が終わった。

実はミュンヘン開催の一九五九年IOC総会はドイツスポーツにとっても布石であった。新生ドイツは第二次世界大戦の汚名を晴らすためにも、やがてオリンピックを招致して開催したい。だから時機を合わせてデيلمが、その意志表示のためにも、さらには布石としても、いわゆる「一九三六年初版本」を再編集して刊行したのである。蘇った「一九五九年再版本」にはデيلمの周到なクーベルタン解説も添えてある。一九六二年の大島が言う。

世界中がこの「オリンピックの回想」に新しい驚嘆と賛美の声を惜しみなくおくれたことは理由のないことではなかった。わたしたちはいまこの回顧録を見て、改めて近代オリンピック競技の人類愛的世界観に基づく深く大い意義について、その創始者の理念を知る機会をもつのである。<sup>(56)</sup>（大島邦訳本・傍点今次）

先に特定した「別の視点」とはミュンヘンでデيلمから直接に手渡されたこの「一九五九年再版本」のことをいう。そのさい大島は一九六四年の東京オリンピックに向けて邦訳をデيلمと約束した。斯くしてクーベルタン布石が、デيلمの再編集本を媒介として、新たな歴史的現実的課題を付帯して大島に引き継がれたのである。

## 結語

選手強化対策本部は朝九時の出勤である。ところで大島は「職員と同じ時間に出て」きて「夜は十一時頃まで精力的に仕事をする」多忙の毎日であった。<sup>(57)</sup> そんななか大島は二冊の翻訳作業にも取り組んだ。一冊は一九六二年出版の「大島邦訳本」で、もう一冊は同年四月一日に出版された『古代オリンピックの歴史』である。後者はハンガリーのフェレンス・メゾー（一八八五～一九六一）の著作で一九二八年の第九回オリンピックアムステルダム大会の芸術部門で金メダルに輝いた。原題の直訳は「オリンピック競技の歴史 Geschichte der olympischen Spiele」となる。生硬

なドイツ語の学術書なので翻訳には慎重であつた。同書では一貫する訳語「オリンピック競技」で通し、「大会」とは一度も書いていない。特色は古代と近代を分離していないことにある。オリンピック競技は、一五〇〇年もの中断を経て、一八九六年にクーベルタンが「オリンピック競技に新生命を与えた」ために復活した。そして「世界中が愛し、ヨーロッパ以外の国々も参加する」ことになった。同書はそのように結ばれている。<sup>(38)</sup>一九五八年五月二十四日、来日中のIOC委員メゾーから大島は翻訳を打診された。メゾーもまた互いに「オリンピックの仲間」と呼び合う盟友である。そのさい互いがデイム計画「一九五九年再版本の編集」を聞き知っていた。斯くして大島はメゾー「古代」とクーベルタン「近代」を歴史の前に立つて一つに繋げたいと決心したのではなかったか。

本文で指摘した二箇所の用字法「オリンピック大会」は、このメゾー本に照らしても「オリンピック競技」と書くべきであつたと思われる。さても大島は「一九三六年初版本」を読み熟していた。その自負があつて大島邦訳本を責任校正扱いとしたのではなかったか。そのため発行日も「六月三十日」になつたと思いたい。

他方で組織委員会ではスポーツ少年団設立問題についても議論した。前述の経緯「スポーツ少年団の胎動」からすれば大島注文は重視される。斯くして設立日は一九六二年六月二十三日と決まつた。クーベルタンが回想する。

「競技復活の宣言は、反対なく一八九四年六月二十三日、最後の会議の日におこなわれた」<sup>(39)</sup>（大島邦訳本）

一九四八年のIOCはこの「六月二十三日」を「オリンピックデー」に定めた。本稿では「少年団設立日」の決定にあたって大島が注文したと推察している。そうであれば大島邦訳本も「六月二十三日」の発行であつたほうが相応しい。別の観点から本稿には一九三五年のクーベルタン講演に関して推察しておきたい「もう一つ」がある。

一九六四年十月十日。第十八回オリンピック東京大会の開会式。安川組織委員会会長が「あいさつ」で語る。

「あたかも本年は、近代オリンピック復活七十周年にあたりますので、これを記念し、近代オリンピックの父ク

ーベルタン男爵のありし日の声を皆様とともに拝聴し、氏の偉業を想起いたしたいと存じます」<sup>(80)</sup>

そのさい一九三五年のラジオ講演におけるクーベルタン肉声（フランス語録音）が響き渡った。そして東京オリンピックの「公式報告書」には「安川挨拶」に続いて次のような肉声の「抄訳」が記録されている。

「オリンピックの祭典を祝うことは歴史に訴えることであり、また、歴史こそ最もよく平和を確保するに役立つものである。老境にはいった私は、大会の近づいたこの機会を利用して、青年と未来についての私の不動の信念を披歴したい」（本文三六頁の大島邦訳本からの引用文を再読してほしい。この抄訳はその引用文中の「頭」と「末尾」の合成になっている。）

しかし報告書は、音源の入手先は何処なのか、なぜ一九三五年の肉声を採用したのか、あるいは「拝聴」が如何なる意義を担うのか、そのような具体的問題については何一つ語っていない。したがって推察するほかない。

組織委員会では、大島「強化本部」招聘による一九六一年のデيلم来日に際して、東京オリンピックの開催に資する実助的な助言を訊き出している。他方でカール・デيلم研究所には音源「一九三五年ラジオ講演」が保管されている。こうした情況証拠を勘案すれば、大島が、即ち組織委員会が、音源の借用を申し入れたと推察しても矛盾はない。ならば「肉声」が、即ち「一九三五年のベルリン講演」が「一九六四年の東京」で響き渡った事実はいかなる歴史的現実的意義を担うことになるのか。言及は皆無である。この問題は「大島が仕掛け人だ」と推察する本稿の研究課題でもある。それでは、なぜ一九三五年のクーベルタン講演がオリンピック運動の布石になるのか。

（デيلمから）聞くところでは、第十一回オリンピックアードはベートーベンの第九シンフォニーの最後の節（第四章「歓喜の歌」）で開会し、それがいままでにない大合唱で斉唱されるそうです。この最後の節は、わたしの子供時代に感動し、それに勇気づけられて奮起した音楽であります。それだけにこれ以上うれしいこ

とはありません。この節はそのハーモニで人間のもつ神性と結びついているように思われるのです。そこでわたしの願うことは、この大合唱が青少年の努力する力と、青少年の喜びを表現し、将来オリンピック競技が開かれる度に斉唱されるようになることです。<sup>(61)</sup>（大島邦訳本・括弧内補注と傍点今次）

右はクーベルタン講演の一節である。大島は一九三六年初版本でこの文脈を読み熟している。そのため本文中に指摘した「思い違い」が起こったとも考えられる。確かに開会式当日には「第九」が「歓喜の歌 *An die Freude*」の合唱と共に市街の劇場で演奏された。そうであればまったくの思い違いともいえない。ここでの問題はその詮索にあるのではない。議論の核心はクーベルタンが、一九三六年のベルリンでオリンピック競技を祝福するために、なぜその前年「一九三五年」に「第九」を所望したのかにあらねばならない。推察を素描しておいて本稿を閉じる。

ディームは一九四九年の自著『スポーツの本質』（大島訳・一九五五）をシラーの箴言を基層に据えて論じた。<sup>(62)</sup>

「…人間は、遊戯しているときだけ人間である（*Der Mensch ist nur insoweit Mensch, als er spielt*）…」

斯くしてシラーに促され、「スポーツに遊ぶとき人間の実存を感知する」ことができるのだから、そこに「スポーツの本質」があらねばならないと説いた。ところで「歓喜の歌」はシラーの作品である。ベートーベンもシラーに同調し一八二四年初演の第九「第四楽章」に採り入れた。おりしも主知主義教育の浸透するなか、クーベルタンもディームも「シラー」と「第九」に同調した。詩人シラーは「生の充実」を謳いあげる。ベートーベンもそうである。こうした思潮的同調が当時のドイツを中心に発祥する生の哲学運動へと繋がっている。同調するクーベルタンは、ディームは、青少年のために心身一元論の「スポーツ教育」を奨励したのである。こうした循環型連鎖の根底には生命原理の覚醒「生の充実」を期待する布石が呼応している。実にこの生命原理の追求が大島鎌吉の命題なのである。

一九三三年から一九三五年にかけてクーベルタンとディームの間に如何なる対話があったのか。二人は一九三六年

の「ベルリンオリンピックアード」を祝福するために、文、化、的、デ、ザ、イ、ン、「オリンピックの在り方」について語り合った。その一つに「歓喜の歌」も含まれている。戦争に代表される近代化路線の負の連鎖は歓喜を埋没させ人間性をも破壊する。このさいオリンピック運動とは、青少年の生きる力「歓喜」を覚醒させるために、人、類、愛、的、世、界、観に基づく生活世界「平和的なスポーツ環境」を創出する実践思想にほかならない。したがってオリンピック運動の本質は青少年育成運動にその根拠があらねばならない。クーベルタンの、デイムの、大島の意志は、ここに原点がある。

## 註・文献

- (1) デイム編／大島訳（原典初版一九三六・再版一九五九・大島訳一九六二）『ピエールドクベルタンオリンピックの回想』、ベースボール・マガジン社（大島邦訳は再版本「一九五九」に拠る）
- (2) 大島鎌吉（一九六二）「訳者のことば」、前掲大島訳書（文献1・三三四頁）、三頁
- (3) クーベルタン（一九三五）「近代オリンピズムの哲学的原理」、前掲大島訳書（文献1・二〇一―二〇七頁）、二〇七頁
- (4) 経緯は織田幹雄『21世紀への遺言』（一九七五）に詳しい。大島の膨大な著作物には「自分事」を語るものは皆無に近い。
- (5) 同前三三六頁
- (6) 岡邦行（二〇一三）『大島鎌吉の東京オリンピック』、東海教育研究所、七五頁
- (7) 大島鎌吉（一九八二）『オリンピック平和賞』受賞に寄せて（『月刊陸上競技』十月号・一七三―一七八頁）、講談社
- (8) クーベルタン前掲論文（文献3）
- (9) マンデル（一九七二）／田島直人訳（一九七六）『ナチ・オリンピック』、ベースボール・マガジン社。同書には「ナチ・オリンピック」の残した「罪悪」の半分以上は「ヒトラーを中心としたカール・デイム博士やアペリー・ブランドージなど虚栄主義者たちの責任である」という「思い込み」が書かれている。確かにデイムとブランドージはオリンピック開催に漕ぎ着けるために奮闘した。しかしヒトラーのためではない。その経緯は本文に書く。
- (10) デイム・L（一九八五）、大島逝去に対する一九八五年四月二十一日付「リゼロット・デイムの哀悼文」。

- (11) 岡前掲書(文献6)、四五頁
- (12) 大島鎌吉(一九五五)「カール・ディーム博士の人と業績」『体育の科学』十一・十二月号・四二六―四三〇頁、杏林書院、四二七頁
- (13) 大島鎌吉(一九八〇)「スポーツの新しい意味」(新聞「関大」第二八四号)、関西大学校友会
- (14) 大島鎌吉(一九三六)「遠征雑感」(欧州遠征記一九三五)一三一―一五頁所収、日本学生陸上競技連合、一四頁
- (15) ディーム(一九五九)「ピエール・ド・クベルタンという人」、前掲大島訳書(文献1、七一―一四頁)、一三一―一四頁
- (16) NPO法人日本オリンピック・アカデミー公式サイト(<http://www.olympic-academy.jp>)デジタル・ライブラリー掲載「国際オリンピック委員会の百年」(第一巻IOC一九九四年版・穂積八洲雄訳)、二二頁
- (17) ブランデージ(一九七二)／宮川毅訳(一九七二)『近代オリンピックの遺産』、ベースボール・マガジン社、一六〇頁
- (18) 前掲デジタル・ライブラリー書(文献15)、二四五―二四六頁
- (19) 同前二五一頁
- (20) 大島鎌吉(一九七二)「ブランデージの説くオリンピックの思想」『体育の科学』八月号・五〇〇―五〇五頁、体育の科学社(杏林書院)、五〇三頁
- (21) クーベルタン前掲論文(文献3)、二〇五頁
- (22) 大島鎌吉(一九四七)「死線のドイツ」、鱗書房。大島の初めての著書でベルリン特派員としての「戦後ルポルタージュ」。
- (23) 伴義孝(二〇一六)「大島鎌吉のスポーツ思想に学ぶ(3)―身体の対抗文化という視点において―」『人体科学』第二十五卷第一号・三四―四七頁、人体科学会。本稿に関心のある向きは同上論文と読み合わせてほしい。
- (24) 大島鎌吉(一九八四)「明日に生きるために思うこと」『体育科教育』十月号・四六―四七頁、大修館書店
- (25) クーベルタン(一九三二)「オリンピックの回想」、前掲大島訳書(文献1・一五―二〇〇頁)、八〇頁
- (26) 大島前掲論文(文献12)、四二八頁
- (27) 前掲デジタル・ライブラリー書(文献15)、二四七頁
- (28) クーベルタン前掲書(文献25)、二〇七頁
- (29) 同前一四〇―一四六頁

- (30) 大島前掲論文(文献12)、四二九頁
- (31) 伴前掲論文(文献23)。本稿の議論を補完するためにもこの拙稿を読み合わせてほしい。また返上問題に関しては、東京都の報告書(一九五二)『一九四〇年第十二回オリンピック東京大会―招致から返上まで―』を参考にした。
- (32) 大島鎌吉(一九三九)『国際学生大会へ選手を送れ』(『陸上日本』三月号・二四頁)、海と空社
- (33) 日本体育協会(一九五八)『スポーツ八十年史』、一五四頁
- (34) 伴義孝(二〇二三)『大島鎌吉というスポーツ思想―脱近代化の身体文化論―』、関西大学出版部。同書を参照。
- (35) 大島鎌吉(一九三九)『思ひをウインの空に残して』(『陸上日本』十二月号・二四―三〇頁)、海と空社、二六頁
- (36) 大島前掲書(文献22)、一〇頁
- (37) 大島鎌吉(一九八四)『ベルリン最後の日』(別冊新聞研究「聴きとりでつづる新聞史」十八号・三一四頁)、三頁
- (38) 大島前掲論文(文献7)、一七六頁
- (39) 同前
- (40) 大島鎌吉(一九四七)『スポーツ界の展望』(下)、毎日新聞(一九四七年一月四日発行)
- (41) 大島前掲書(文献22)、五三頁
- (42) 同前四頁
- (43) 大島鎌吉(一九四九)『近代オリンピックの検討』(『探究』十号・五四―五九頁)、法政大学学友会、五四頁
- (44) 同前五九頁
- (45) デイム前掲論文(文献15)、一四頁。クーベルタンはこの箴言を以て「スポーツは選択に迫られている」状況を訴えた。
- (46) 同原則は「クーベルタン布石」として一九三〇年のIOC会議で討議された。クーベルタン前掲書(文献25)、一九七頁
- (47) 大島鎌吉(一九四九)『スポーツと文化』(『体育』十二月号・四五―四七頁)、金子書房、四六頁
- (48) デイム前掲論文(文献15)、九頁
- (49) 大島鎌吉(一九五五)『ドイツの青少年運動(1)』(『新体育』三月号・二四―二八頁)、新体育社、二四頁
- (50) 平沼亮三(一九五六)『発刊のことば』(大島編著『立ち上るドイツ青少年』三一六頁)、全国都市体育研究協議会、三頁
- (51) 大島前掲論文(文献7)、一七四頁

- (52) 大島鎌吉(一九五九)『スポーツ少年団』への胎動」(『体育科教育』四月号・一三一―一八頁)、大修館書店、一三頁
- (53) 大島鎌吉(一九七六)『金メダル15個を宣言』(『二億人の昭和史昭和スポーツ史』二二七頁)、毎日新聞社
- (54) こうした一連の経緯は一九八五年に追悼刊行された『人間 田畑政治』(ベースボール・マガジン社)に詳しい。
- (55) 取材ノートは一九八六年にご子息から関西大学へ寄贈され、現在は「大島鎌吉スポーツ文化アーカイブス」に所蔵。
- (56) 大島前掲論文(文献2)、3頁
- (57) 鈴木光雄(一九八五)「原稿の判読に苦労」(学園大学葬委員会編『故大島鎌吉先生を偲んで』三六―三七頁)
- (58) メゾー／大島訳(原典一九二八・改訂一九三〇・大島訳一九六二)『古代オリンピックの歴史』、ベースボール・マガジン社
- (59) クーベルタン前掲書(文献25)、二五頁
- (60) オリンピック東京大会組織委員会(一九六六)『第十八回オリンピック競技大会公式報告書』(下)、二二六頁
- (61) クーベルタン前掲論文(文献3)、二〇六頁
- (62) デイーム／大島訳(原典一九四九・大島訳一九五五)『スポーツの本質―その教え―』、万有出版、一九頁